

被害者意識、身代わり、脱人間化：ジェノサイドへの道

第二次世界大戦前のドイツの歴史的軌跡と、2025年5月17日時点でのイスラエルの行動は、国の被害者意識がどのようにして少数派グループへの体系的な標的化につながり、最終的にジェノサイドに終わるかという、深く不安を煽る類似性を明らかにしています。両ケースは、国民的被害者の物語を育み、社会的課題の責任を少数派に押し付け、そのグループを脱人間化し、彼らに対する暴力を扇動し、ジェノサイド行為に至るパターンを示しています。このエッセイは、公共のレトリック、軍事作戦、人権報告、学術的分析を通じて、イスラエルのパレスチナ人に対する行動を、1920年代と1930年代のドイツのユダヤ人への扱いと比較し、それがホロコーストにつながった経緯を検証します。

I. 被害者意識：攻撃の基盤

第二次世界大戦前のドイツ（1919–1939）：第一次世界大戦後、ドイツは厳しい賠償金と領土喪失を課したヴェルサイユ条約によって、深い被害者意識を育みました。この物語は、ドイツが不当に抑圧され、内部の勢力によって裏切られ、地位を弱められたと描写しました。プロパガンダ、教育、公共の言説を通じて、ドイツ人は自分たちを被害者と見るよう条件付けられ、国家の苦しみと過去の栄光を取り戻す必要性に焦点を当てました。自己憐憫と自国の課題における役割を認めない拒否によって特徴づけられたこの意識は、ドイツの苦難の責任者と見なされた者に対する攻撃的政策の基礎を築きました。

イスラエル（1948–2025）：イスラエルの国家アイデンティティは、600万人のユダヤ人の命を奪い、ユダヤ人の意識に永続的な影響を与えたホロコーストのトラウマによって深く形成されています。「二度と繰り返さない」という原則は、イスラエルを永遠の被害者として位置づけ、ナチスの迫害を彷彿とさせるその消滅を求める勢力から常に脅かされています。ウィキペディアの被害者意識に関する記事は、自己憐憫、道徳的エリート主義、共感の欠如といった特徴を挙げ、これらがイスラエル社会に深く根ざしています。ホロコースト教育、国家記念行事、政治的レトリックは、この被害者意識を強化し、しばしば歴史的トラウマをパレスチナ抵抗のような現代の脅威と結びつけます。この意識は、イスラエルの国際的な批判への対応に見られます——例えば、2024年の南アフリカのICJ訴訟では、ジェノサイドの非難はイスラエルの存在権に対する反ユダヤ主義的攻撃として却下され、批判に対する過敏さとその苦しみの承認を求めるニーズを反映しています。

類似点：両国は、攻撃者-被害者のダイナミクスを逆転させる被害者意識を育みました。ドイツは裏切りと抑圧の被害者として自身を描写し、イスラエルはホロコーストの記憶に根ざした反ユダヤ主義的攻撃の被害者と見なします。ウィキペディアの記事で説明されているこの意識は、責任を受け入れる拒否を助長します——ドイツは第一次世界大戦での役割を、イスラエル

は占領での役割を——両者がスケープゴートとされた少数派に対する暴力を正当化することを可能にしました。

II. 身代わり：社会的課題の責任を少数派に押し付ける

第二次世界大戦前のドイツ：1920年代と1930年代、ドイツはユダヤ人を社会の苦難の身代わりにし、1923年のハイパーインフレーション、失業、文化の衰退などの経済危機を彼らの影響に帰しました。プロパガンダはユダヤ人を不忠な機会主義者として描写し、ドイツ人を搾取する内部の敵として枠組みました。この物語は、メディア、教育、ユダヤ人を公的役割から排除する法律などの公共政策を通じて強化され、彼らがドイツの問題の根源であるという認識を固めました。

イスラエル：1948年の建国以来、イスラエルは一貫してパレスチナ人をその安全保障と政治的課題の責任者として非難し、占領による体系的な抑圧をしばしば見過ごしてきました。2023年のヨルダン川西岸での36人のパレスチナ人子ども殺害に関する記事はこれを示しており、イスラエル軍は、石を投げるなどの軽微な行為で子どもたちを脅威として分類し、最も若いパレスチナ人でさえ騒乱の身代わりにすることで死を正当化しました。2023年10月7日の攻撃は、最初にハマス主導の虐殺として報告され、1195人のイスラエル人の死を招いたとされ、全パレスチナ人口を悪魔化するために使用されました。しかし、その後の調査では、イスラエル軍の「ハニバル指令」の使用——イスラエル兵の捕獲を防ぐために、イスラエル人の命を犠牲にしてでも無差別な武力を使用する——がこれらの死傷者に寄与したことが示され、報告ではヘリコプターの射撃と戦車の砲撃がハマス戦闘員と共にイスラエルの人質を殺害したとされています。それにもかかわらず、より広範な物語はすべてのパレスチナ人を身代わりにし、2024年12月の市民に対する体系的暴力の人権報告に反映されています。2023年のエルサレム旗行進での「アラブ人に死を」といった公共のレトリックは、パレスチナ人をさらに身代わりにし、彼らの存在そのものが問題であると示唆し、極右指導者によってパレスチナ人がイスラエルの存続の障害として描かれる感情を反響させています。

類似点：両国は社会的課題の身代わりとして少数派を非難しました。ドイツは経済的および文化的問題をユダヤ人に帰し、イスラエルは安全保障の脅威をパレスチナ人に帰し、しばしば占領が抵抗を煽る役割や、10月7日のイスラエル人の死にハニバル指令が寄与した自身の行動を無視します。ウィキペディアの記事の「望ましくない状況の原因として他者を特定する」特性は両ケースで明らかであり、ドイツは自身の失敗を否定し、イスラエルは責任を回避し、身代わりグループに対する攻撃的行動を正当化します。

III. 脱人間化と暴力の扇動

第二次世界大戦前のドイツ：脱人間化は戦前ドイツの政策の要であり、プロパガンダはユダヤ人を「アーリア」種族に対する下等な脅威として描写しました。メディアと公共キャンペーンはユダヤ人の人間性を剥奪し、社会的危険として描写しました。このレトリックは暴力を扇動し、ドイツの優越性を称賛する大規模集会がユダヤ人を中傷し、敵意を正常化しました。1938年までに、ユダヤ人コミュニティに対する国家承認の暴力が噴出し、ユダヤ人の苦しみに対する国民の無感覚化をもたらした長年の脱人間化プロパガンダの直接の結果でした。

イスラエル：イスラエルのパレスチナ人に対する脱人間化は、レトリックと行動の両方で明らかです。2023年のエルサレム旗行進で、参加者が「アラブ人に死を」と叫んだことは、暴力を公然と扇動し、パレスチナ人を死に値する集団的敵として描写し、ドイツの集会の敵対的スローガンに似ています。2023年のヨルダン川西岸でのパレスチナ人子ども殺害に関する記事は、この脱人間化をさらに示しており、子どもたちは中立化すべき脅威として扱われ、イスラエル軍は彼らの人間性にほとんど配慮を示さず、軽微な行為に対する致命的な武力を正当化しました。ガザでは、2024年12月の人権報告が、病院などの民間インフラへの攻撃や飢餓状態の強制を含む体系的暴力を強調し、パレスチナ人を軍事キャンペーンの単なる標的に還元し、彼らの基本的人間性を一切考慮しません。

類似点：両国は少数派を脱人間化して暴力を扇動しました。ドイツはユダヤ人を下等人種として描写する明確なプロパガンダを使用し、イスラエルの脱人間化は実際的であり、パレスチナ人を排除すべき脅威として扱います。これは証拠に示されています。ウィキペディアの記事の「共感の欠如」の特性は両ケースで明らかです——ドイツはユダヤ人の苦しみを無視し、イスラエルはパレスチナ人の命を軽視し、脱人間化されたグループに対する暴力を正常化します。

IV. ジェノサイドの頂点

戦前ドイツから第二次世界大戦（1939-1945）：ドイツの軌跡は1941年に始まったホロコーストで頂点に達し、600万人のユダヤ人のジェノサイドに至りました。これは長年の教化、身代わり、脱人間化の結果であり、国家は死の収容所、集団銃撃、ゲットーでの飢餓といった体系的手法を用いてユダヤ人人口を根絶しました。グループを破壊する意図は明白で、国連ジェノサイド条約の定義を満たし、ユダヤ人をドイツの存続に対する実存的脅威として枠組み、国民を犯された残虐行為に無感覚化する被害者意識によって正当化されました。

イスラエル（2023-2025）：2023年10月7日の攻撃後のイスラエルのパレスチナ人に対する行動はジェノサイドで頂点に達し、2025年5月のジェノサイド研究NRC記事によって確認され、研究者はイスラエルのガザでの行動を満場一致で「ジェノサイド」と分類し、2024年12月のアムネスティ・インターナショナル報告もこれを裏付けます。証拠には以下が含まれます：

- **体系的暴力と剥奪**：2024年12月の報告は、病院などの民間インフラへの攻撃や飢餓状態の強制を記録し、2024年11月までに44,000人以上のパレスチナ人が死亡し、190万人が避難民となつたと、UNRWAが報告しています。
- **意図**：ガザを居住不可能にすることを目的としたこれらの行動の体系的性質は、国連ジェノサイド条約の基準——殺害、深刻な危害の引き起こし、物理的破壊をもたらす条件の強制——に一致します。

ウィキペディアの記事で概説されたイスラエルの被害者意識は、道徳的エリート主義（イスラエルを道徳的に優れていると見なす）、共感の欠如（パレスチナ人の苦しみを無視）、反芻（イスラエルのトラウマに焦点を当てる）といった特性を通じてこのジェノサイドを可能にし、パレスチナ人の体系的破壊を、知覚された脅威に対する「防御的」行為として正当化します。

類似点：両国は被害者意識に駆られて、その軌跡をジェノサイドで終えました。ドイツのホロコーストとイスラエルのガザでのジェノサイドは、国家主導の暴力が少数派の破壊を標的とし、体系的手法（殺害、剥奪）を用い、グループを根絶する明確な意図を示しています。規模は異なります——600万人のユダヤ人に対し、44,000人以上のパレスチナ人——が、意図とメカニズムは驚くほど似ています。

V. ニーチェの警告：被害者意識による変容

ニーチェの引用——「怪物と戦う者は、その過程で自分が怪物にならぬよう注意すべきである」と「深淵を覗き込むとき、深淵もまたあなたを覗き込む」——は、被害者意識が両国をジェノサイドの実行者に変えた方法を理解するための哲学的レンズを提供します。

怪物との戦い

- **第二次世界大戦前のドイツ**：ドイツはユダヤ人をその存続を脅かす「怪物」として枠組み、この物語を利用して彼らの排除と最終的な絶滅を正当化しました。この知覚された悪と戦う中で、ドイツは怪物となり、プロパガンダを通じてユダヤ人を脱人間化し、ホロコースト中にジェノサイドを犯しました。
- **イスラエル**：イスラエルはパレスチナ人を「怪物」として位置づけ、しばしば歴史的抑圧者にたとえ、その行動を正当化します。しかし、そうすることで、ヨルダン川西岸での子どもの殺害、ガザの民間インフラへの攻撃、2024年人権報告と2025年NRC記事に裏付けられたジェノサイドの犯行といった怪物的な戦術を採用します。道徳的エリート主義を持つ被害者意識は、これらの行為を存続に必要だと弁解し、ドイツの正当化を反映します。

深淵を覗き込む

- **第二次世界大戦前のドイツ**：ドイツの第一次世界大戦後の不満への固執——国家屈辱の「深淵」——は、その闇を反映させ、ホロコーストによる道徳的腐敗に陥り、反対すると主張した悪そのものとなりました。
- **イスラエル**：イスラエルのホロコーストのトラウマへの執着——歴史的苦しみの「深淵」——は、その行動に反映され、ガザでジェノサイドを犯し、防止を誓った残虐行為を反映します。ウィキペディアの記事の共感の欠如と反芻の特性は、パレスチナ人の苦しみを無視しながら自身の痛みに焦点を当てるイスラエルによって、この堕落を悪化させます。

類似点：ニーチェの警告は、両国における被害者意識の変容力を強調します。知覚された敵と戦う中で、彼らはジェノサイドの実行者となり、トラウマのそれぞれの深淵を覗き込むことで、その闇を反映し、歴史的抑圧者の戦術を採用しました。

VI. より広範な影響と倫理的懸念

第二次世界大戦前のドイツと2025年5月17日時点のイスラエルとの類似点は、危険なパターンを明らかにします：武器化された被害者意識は、少数派グループの体系的破壊につながる可能

性があります。ドイツの軌跡——1920年代初頭からホロコーストまで——は、教化、身代わり、脱人間化がジェノサイドで終わる方法を示します。イスラエルの軌跡——1948年の建国からガザでのジェノサイドまで——は、公共のスローガン、軍事暴力、体系的破壊の証拠に見られるように、同じメカニズムを可能にする被害者意識とともに、類似の道をたどります。

倫理的懸念：

- **道徳的皮肉**：ジェノサイドからの避難所として設立されたイスラエルは、パレスチナ人に対してナチスドイツを彷彿とさせる戦術を再現し、「二度と繰り返さない」というその設立理念に矛盾します。共感の欠如と道徳的エリート主義は、イスラエルがこの皮肉に盲目である原因となり、パレスチナ人の人間性よりも自身の被害者意識を優先します。
- **国際的共謀**：1945年までホロコーストを阻止できなかった国際社会の失敗は、2025年NRC記事に指摘されるように、イスラエルのジェノサイドへの不十分な対応に反映され、2024年のICJ訴訟などの法的行動にもかかわらず、残虐行為が続くことを許しています。
- **トラウマのサイクル**：イスラエルの行動はトラウマのサイクルを永続化し、パレスチナ人の苦しみがナチス下でのユダヤ人の苦しみを反映し、将来の紛争と怨恨を潜在的に煽ります。2023年10月7日の攻撃に関する初期の物語は、イスラエルの一部の死傷者における役割にもかかわらず、パレスチナ人を身代わりにし、このサイクルを悪化させます。

結論

第二次世界大戦前のドイツと2025年5月17日時点のイスラエルとの類似点は、深く、非常に不安を煽るものであります。両国は、被害者意識に駆られて——ドイツは第一次世界大戦後、イスラエルはホロコースト後——少数派（ユダヤ人、パレスチナ人）を社会的問題の身代わりにし、彼らを脱人間化し、暴力を扇動し、最終的にジェノサイドを犯しました。ドイツのホロコーストとイスラエルのガザでのジェノサイドは、公共のレトリック、軍事行動、人権報告、学術的コンセンサスによって証明されるように、同じメカニズムを反映しています：国家主導の暴力、体系的手法、根絶の意図、責任を受け入れる拒否と標的グループへの共感の欠如によって正当化されます。ニーチェの警告は、彼らが戦った「怪物」となり、そのトラウマの「深淵」を行動に反映したこの変容を照らし出します。この分析は、被害者意識が暴力のサイクルを永続化する危険性を強調し、歴史的トラウマが共感と責任をもって対処されない場合、どのように新たな残虐行為につながるかについて批判的考察を促します。